

## スウィフトの生涯 (I)

スウィフトの誕生から

ウィリアム・テムプルの死まで (1667 — 1669)

三 浦 謙

ジョナサン・スウィフトは1667年11月30日、聖アンドリュース祭<sup>(1)</sup>の当日、ダブリン市ホゥイーズ・コート7番地<sup>(2)</sup>で生まれた。この地所はスウィフトが後年首席司祭となった聖パトリック寺院<sup>(3)</sup>から歩いて数分のところにある。祖父トーマス・スウィフト<sup>(4)</sup>はロス<sup>(5)</sup>近傍グッドリッチ<sup>(6)</sup>の王党派の牧師で、同名の父ジョナサンはトーマスの5番目の息子である。ジョナサンは18歳の時、兄弟と連れ立ってアイルランドに渡り、晩年はダブリンの法律家協会キングス・インズ<sup>(7)</sup>の執事という閑職に就いていたが、スウィフトが生まれると7ヶ月前に借財を残して病死した。母はレスター州<sup>(8)</sup>出身のアビゲイル・エリック<sup>(9)</sup>である。スウィフトの自叙伝によると、エリック家は由緒ある家柄で、その祖先にはウィリアム征服王のイングランド侵寇のさい軍を率いて、これと戦ったが結局敗北した勇将がいる。彼は老境に入ってからレスター州に隠退し、その地で余生を送った。エリック家は、その後、代が変わるごとに家運が衰え、アビゲイルの父はレスター州ソーントン<sup>(10)</sup>の教区牧師であった。

夫ジョナサンの死後、年金20ポンドの収入があるばかりで困窮した母アビゲイルは夫の長兄ゴドウィン<sup>(11)</sup>を頼った。彼女はスウィフトのほかにも、スウィフトより1歳半年上の娘ジェイン<sup>(12)</sup>をも抱えていた。

姉のジェインは成人してロンドンのブライド・ストリート<sup>(13)</sup>に住まうフェントン<sup>(14)</sup>という皮革商人のもとに嫁ぐが、商売は思わしくなくて結局は破産、夫とは死別する。その後は、スウィフトから毎年15ポンドの手当

をもらい、これもスウィフトの世話で、テンプル家<sup>(15)</sup>に身を寄せ、当主サー・ウィリアム・テンプルの妹ジファード夫人<sup>(16)</sup>の身の回りの世話をするが、その後リュウマチで苦しむようになるとテンプル家を去らざるをえなくなる。ジファード夫人がジェインの病気を嫌ったためである。回復が覚束ないことを知るとジェインは息子をスウィフトに託す。以後のことはわからない。

ところで、アビゲイルに頼りにされたゴドウィンは、チャールズ二世による王政復古の時期には、ロンドンの法廷弁護士協会グレイズ・イン<sup>(17)</sup>の会員であったが、最初の妻の親戚筋に当るオーモンド家<sup>(18)</sup>からアイルランドで法律業務に就くよう慫慂された。アイルランドに渡ったゴドウィンは勤勉と明敏な処世で財を蓄え、オーモンド公爵の尽力もあって、アイルランド南ティッパラリー州、パラティン伯領<sup>(19)</sup>の法務長官にまでなった。彼は4度結婚し、その中の3人は豊かな家庭の持参金つきの息女だった。その関係もあって、彼は、かなりの畜財もできた。年収は一時期3千ポンドにも達したといわれ、当時ダブリンで最も富裕な市民の1人だった。

さて、スウィフトが1歳の時に、風変りな事件が起きた。スウィフトを溺愛していた乳母が郷里ホワイトヘイヴン<sup>(20)</sup>へ、死期の迫った親戚を見舞うという理由でスウィフトを連れて帰ってしまい、手元で3年間養育した一件である。母親は身体の弱い子供を気遣って、再び危険な航海をさせてアイルランドへ連れ戻すよりは、スウィフトの保育に熱心な乳母に一定期間一切を任せるほうが安全だと考えた。

スウィフトにとって、このホワイトヘイヴンへの愛着は終生続いた。最晩年に近い1739年、たまたまダブリンに居合わせたホワイトヘイヴンの子供連れの商人を自宅に招いて夕食を振舞ったりしている。また、アイルランド人ではないかと他人にいわれるのを嫌ったスウィフトは、友人や知己に、このイングランドでの生活を楽しげに語った。スウィフトは自身がイングランドの人間であることを他人にわかってもらいたかったのである。そのために、ホワイトヘイヴンの一件は、スウィフトに役立った。

4歳の時、スウィフトはアイルランドの母の元に連れ戻された。その頃、

乳母の教育の効があつてか、スウィフトは聖書のどの章も読むことができたというエピソードが伝わっている。母はその後どういう理由からか郷里のレスターにひきこもってしまうので、スウィフトは再び孤児同然の身の上となる。母は1710年4月24日長病いの後他界するが、スウィフトは同年5月10日に姉のジェインからその旨の報せをうけている。

6歳でスウィフトはアイルランドのイートンといわれたキルケニーのグラマー・スクール<sup>(21)</sup>に、おじゴドウィンの世話で入学する。スウィフトの在校当時の模様は今日ほとんど伝わっていないが、屠殺業者の元にゆくことになっていた疥癬病みの廃馬を買いこんで、やがて馬が倒れて死ぬまで、馬主の威厳を発揮して容赦しなかったというのは、キルケニー在校当時のスウィフトの逸話として、シェリダン<sup>(22)</sup>が伝えている話である。

また、キルケニーの町では、ローマ・カトリックとプロテスタントのそれぞれの居住地が中心部を流れる川によって二分され、キルケニーの喧嘩ねこ<sup>(23)</sup>という譬え話が生まれるほど両派の争は止むことがなかった。スウィフトは少年期から、このような宗教上の対立を否応なしに経験させられていた。

キルケニー校の同窓生に、いとこのトーマス・スウィフト<sup>(24)</sup>とフランシス・ストラットフォード<sup>(25)</sup>、それに後年の劇作家ウィリアム・コングリーヴ<sup>(26)</sup>がいる。この3人はトリニティ・カレッジでも同窓で、コングリーヴだけが2年後輩だった。トーマス・スウィフトは、後、サリー州ピュッテンハム<sup>(27)</sup>の教区牧師になったが、スウィフトは彼のことを軽蔑して「田舎牧師のいところ」とよんでいた。ストラットフォードは実業界に入り、南海会社<sup>(28)</sup>の重役にまでなるが、会社の倒産により失脚、次いで知人の金1万ポンドを株でしくじり、結局、クイーンズ・ベンチ<sup>(29)</sup>に収監された。1711/2年の3月スウィフトは入獄中のストラットフォードを見舞っている。ストラットフォードは保釈で出獄後、再起を図って海外に出たが、その後のことはわからない。コングリーヴはスウィフトが彼への頌詩<sup>(30)</sup>を書いた1693年にはドライデン<sup>(31)</sup>に認められていて詩人としての評価は固まり、その戯曲<sup>(32)</sup>は王立座<sup>(33)</sup>で上演されていた。当時スウィフトはまだ無名だった

だけに、前述の頌詩には、コングリーヴへの羨望の念が隠せない。だが、1710年以降、コングリーヴは痛風で苦しみ、白内障で両眼とも失明同然になり、虫めがねなしでは活字が読めなくなった。スウィフトは、このキルケニー校でのかつての後輩の病状をしきりに気遣っている。

スウィフトが卒業した14年後には、ジョージ・バークレー<sup>(34)</sup>がキルケニー校に入学している。バークレーはスウィフト壮年期の恋人ヴァネッサ<sup>(35)</sup>が死んだ時、遺産受取人の1人となった。バークレーは当時ドロモア<sup>(36)</sup>の首任司祭で、後、クロイン<sup>(37)</sup>の司教となるが、彼は若年のうちに哲学の著作を公けにする才子だった。哲学を好まないスウィフトはバークレーのことを思辯に趨りにすぎると考えていた。『ガリヴァー旅行記』第3篇で、哲学者が揶揄されているが、バークレーはそのモデルの一人だとされている。

1682年春、14歳でダブリンのトリニティ・カレッジに自費生として入学する。いとこのトーマス・スウィフトと一緒に、同じ師<sup>(38)</sup>について勉学することになるが、散見される大学の記録の中で、スウィフトへの言及が時にはクリスチャン・ネームに触れていないため、当該事項がジョナサンを指すかトーマスを指すか判定に苦しむ結果を生むことになり、スウィフトの当時の伝記資料を一層曖昧にしている。

ところで、ゴドウィンおじは一時期富裕であったとはいえ子沢山で、14人の息子と3人の娘があり、このうち3人の息子しかトリニティ・カレッジに進ませていないので、トリニティ・カレッジへの進学については、スウィフトはゴドウィンおじに大いに感謝しなければならないところだが、実情は、感謝するどころか激しく嫌悪している。スウィフトは自叙伝の中で次のように告白している。

「ごく近い親戚のひどい仕打ちにあって、すっかりヤル気をなくしたので、学業はたいへん疎かになった。2、3の科目は生まれつき余り興味がもてず、歴史と詩を読むのに専念した」<sup>(39)</sup>

「ごく近い親戚」というのはゴドウィンおじである。スウィフトは、また

ゴドウィンおじを「法網をくぐるのに長けた悪弁護士<sup>(40)</sup>」だったといっておきしている。さらに、ダブリンの大執事ホイッティンガム師<sup>(41)</sup>との会食の席では、スウィフトは「ゴドウィンおじから犬なみの教育を受けた」と述べている。これを聞いたホイッティンガム師は、怒って「あなたには犬なみの感謝の気持ちもないのか」と応酬している<sup>(42)</sup>。そして奇妙なことに、スウィフトは余り恩恵を蒙っていないと思われるウィリアムおじ<sup>(43)</sup>に、素直に謝意を表明している。

ピルキントン夫人<sup>(44)</sup>はこのことに関連してスウィフトが「正しい寛大な処置をいろいろしてくれる人はたくさんいるが、その中で相手に感謝の気持ちを起させる行為はきわめて少い<sup>(45)</sup>」と語っていたと伝えている。

次に、ゴドウィンおじの咎にしているトリニティ・カレッジでの学業成績の不振だが、スウィフトはこれを決して隠そうとはしていない。学業不成績の結果、スウィフトは「整然と規則を守って学生生活を送ったのだが、怠惰と勉学不十分の理由で、学士号を差し止められた<sup>(46)</sup>」のである。

だが、この前半の記述にかんしては、トリニティ・カレッジの副学長を勤めたジャッキー・バレット<sup>(47)</sup>が1808年バッテリー・ブックス<sup>(48)</sup>の記述を裏付けに述べているスウィフトの行状にかんする報告と喰違いがみられる。スウィフトの大学生活には、2年未満の長期にわたって、懲罰期間は70週を上回り、規律違反の罪状がいろいろ記録されているという。そして、スウィフトは大学院生時代には、チャペル礼拝の義務を怠ること、講義をさぼること、市街を徘徊して夕刻の点呼をうけないこと、それに、いかにもありそうなことだが、大学当局その他の権威筋を相手に悪罵雑言の文書を書くことが常習であった。その結果、学内の定額食<sup>(49)</sup>を差し止められ、学寮の大食堂で、ジュニア・ディーンのオウエン・ロイド<sup>(50)</sup>の面前で、膝まずいて屈辱的な謝罪を強いられた。

スウィフトが特別の恩典<sup>(51)</sup>で、B. A. を取得したのも不思議でない。この不名誉な記録は今日まで残っているが、スウィフトはこの不面目を恥じ入ったためか、母校にたいして最後まで屈辱感を拭い去ることはなかった。1682年7月、ウィリアム・テムプルの計らいで、オックスフォードの

ハートホール学寮に入り、M. A. の学位を取得するが、このオックスフォードの生活と較べると、トリニティ・カレッジでの毎日は重苦しかったようである。ウィリアムおじへの書簡で、スウィフトは次のような感想を洩らしている。

恥ずかしい話ですが、ダブリン大学での7年間よりも、オックスフォードでの赤の他人の世話になった数週間のほうが、私には余程ありがたかった<sup>(52)</sup>。

ところで、スウィフトの学業不成績は、論理学を主要科目とする当時の教育方針にも問題があった。スウィフトは今日ほとんどその名も知られていない旧式の論理学を気質的に受け入れることができなかった。どんなチューターもスウィフトに、この方面の著作をいずれも3ページ読ませることはできなかったといわれている。スウィフトには、論理学以外にも2, 3興味を示せない科目があった。ディーン・スウィフト<sup>(53)</sup>には、物理学、形而上学、自然哲学、数学が苦手と理解できなかったと付け加えている。フォスター<sup>(54)</sup>が発見したトリニティ・カレッジ時代のスウィフトの成績では、ギリシャ語およびラテン語が bene <sup>(55)</sup> 哲学が mile <sup>(56)</sup>、神学が negliger <sup>(57)</sup>であったと記されている。

後、トリニティ・カレッジの学長になった同時代人のボールドウィン博士<sup>(58)</sup>は、スウィフトがトリニティ・カレッジで際立っていたのは、火器のように激しく人に食ってかかることぐらいだったと述べている。

さて、1688年の後半から1689年の初頭にかけては、イギリス史上大きな動乱の時期である。1688年11月5日、オレンジ公ウィリアムはデヴォン<sup>(59)</sup>に上陸し、緩慢な速度でロンドンに向った。すると、1ヶ月足らずのうちに、アイルランドから多くのプロテスタントが洪水のようにイングランドに移住した。ウィリアム・スウィフトもアダム・スウィフトも、それぞれ、困窮した家族を抱えてイングランドに移った。だが、当時、昏睡状態に陥っていたゴドウインおじは、ダブリンに取り残されて、1695年12月7日、当地で他界した。彼の遺骸は、2日後、聖ウエルバーク寺院に埋

葬された。

ところで、オレンジ公ウィリアムが1688年12月18日の夜半ロンドンに入ると、その4日後、ジェームズ二世はロチェスター<sup>(60)</sup>からフランスへ逃げるように勧告をうけた。トリニティ・カレッジの理事会はアイルランドで騒擾が起きるのは必至とみたので、1689年2月13日、安全のために大学を徹去することを妥当と考える者は、随時その旨行動してほしいという裁定を下した。スウィフトがいつアイルランドを脱出したかは明確でない。バレット博士はスウィフトはいとこのトーマスと1689年1月26日に、アイルランドを離れてレスター居住の母の元に向ったとみている。しばらく母の元に滞在してからスウィフトは母に書いてもらった紹介状を携えて、シーン<sup>(62)</sup>に仮寓していたテンプルを訪ねた。

スウィフトを迎えたテンプルの反応ぶりに触れる前に、ここに一つの挿話がある。

それは母の元に滞在中のスウィフトにまつわる艶話である。スウィフトと同じ聖パトリック寺院の教区牧師であったジョン・ウォロール師<sup>(63)</sup>宛の手紙<sup>(64)</sup>によると、レスター滞在中、スウィフトは豆痕のあるベティ・ジョーンズ<sup>(65)</sup>という宿屋の娘と昵懇の仲になった。スウィフトの母親は反対だったらしい。スウィフトがロンドンに出向いていた間に、ベティーはロウボロウ<sup>(66)</sup>の宿屋の主人と結婚した。子供が何人かできたが、アンという女の子の外は皆夭折した。1728 / 9年に書かれたこの手紙の中で、スウィフトはウォロール師に、このアンが牧師館にきたら5ポンドの金子を与えるように指示している。アンがベティーとスウィフトの間の子供であったかどうかはわからない。

さて、ウィリアム・テンプルの居宅を訪れたスウィフトは、出立に当たってアビゲイルから大要次のようなことをいわれていた。

サー・ウィリアム・テンプルは偉い人です。おまえの将来を考えてくださって、教会関係か政府関係の就職を骨折ってくださると思う。あの方の奥さんは私たちの親戚だし、あの方のお父さんのジョン・テム

プルは、おまえのお父さんやおじさんたちと昵懇だったんだから。

スウィフト自身、自叙伝の中で、ウィリアム・テンプル宅に赴いた理由として、「テンプルの父はスウィフト家と大の仲良しであった<sup>(67)</sup>」点を挙げている。テンプル家は17世紀の初めからアイルランド問題にかかわり、当主ウィリアム・テンプルの父は王政復古の前後アイルランドの控訴院判事で、スウィフトのおじたちをよく知っていた。

ところで、ウィリアム・テンプルという男は当代の外交界で重きをなした人物で、三国同盟<sup>(68)</sup>やブレイダ条約<sup>(69)</sup>の締結、皇女メアリーとオレンジ公との婚儀を促進させたことなどは彼の功績とされている。晩年はムア・パーク<sup>(70)</sup>に隠棲して園芸を楽しんだり執筆に専念したりして盛んな慾憑があったにも拘らず、二度と政界に足を踏み入れることはなかった。彼はまた moral iceberg といわれたくらい冷徹な男で、不義が平然とまかり通っていた時代にも、妻以外の女性と浮名を流すこともなかった。スウィフトが訪れた当時、お気に入りのムア・パークを離れてシーンに仮寓していたのは、愛息ジョン・テンプル<sup>(71)</sup>の居宅があったためと、オレンジ公ウィリアムがロンドンへ向けて進軍中に、反乱軍の蹶起を恐れたためだった。

さて、上述のような繋りと、おそらくは、二度目の論文集を刊行するため一時秘書を必要とするという理由から、若いスウィフトを受入れたものの、テンプルは長く手元に留めておく気はなかった。当代一流の外交官の目からすればナイフとフォークの使い方も定まらないアイルランドの書生は山だしの猿同然に思えたことだろう。テンプル家滞在の最初の1年間の模様は今日不明だが、2人間の距離は測り知れないものがあったに違いない。1年後、テンプルは、友人で新王の下で国务大臣を務めていたアイルランド在住のロバート・サウスウエル卿<sup>(72)</sup>にスウィフトの就職を依頼する。スウィフトはテンプルに書いてもらった紹介状を携えてサウスウエルに会いに行くが、その紹介状には、スウィフトはギリシャ語、ラテン語それに多少フランス語の心得があり、正直で勤勉で字がうまいから、サウスウエルの下で書記でもやらせるか、さもなくば、トリニティ・カレッジの



フェローにでも推薦してもらえないかといった旨のことが書いてあった。だが、サウスウエルはスウィフトを自分の手元に置こうとせず、トリニティ・カレッジのフェローシップをスウィフトにとらせることもなかった。

自叙伝では、この事実をとりあげていない。「20歳前に、果物の飽食で腹を冷やし、目まいがするようになって危うく死にかけた。2、3年置きに死ぬまで続いたこの軀の不調を回復するために…医者の勧めでアイルランドに戻ったが、かえって悪化したので、間もなくウィリアム・テンプル卿の元に戻った<sup>(73)</sup>」ことになっている。果物というのはゴールデン・ピピン（リンゴの一種）である。自叙伝をまだ執筆していない1727年8月19日のハワード夫人<sup>(74)</sup>への手紙の中で、スウィフトはリッチモンドで一度にゴールデン・ピピンを百個食べて目まいがするようになったと述べている。事実、1690年頃からスウィフトは「2、3年置きに死ぬまで続いた」この業病に悩まされるようになる。病名は、耳の三半規管の疾患のため目まいと吐き気とツンボをひきおこすメニエール症候群であるとの観測<sup>(75)</sup>がある。

こうして、1691年の夏には、スウィフトは再びテンプル家に落ち着くことになる。スウィフトの待遇は食事つき年20ポンドの書生で、もっぱらテンプルの口述筆記などを仕事とし、食事のさいはテンプルとの同席は許されなかった。この処遇は長く続いたらしいが、1694年の夏にまでおよぶこの2回目のテンプル家滞在期間中に、スウィフトの学力の向上と社会への進出には目ざましいものがある。

まず、経済的な面での冷遇とは裏腹に、スウィフトの力量を評価したテンプルは、スウィフトをオックスフォードのハートフォード学寮<sup>(76)</sup>に入学させ、その間に、アイルランド在住のおじを介して必要な証書類をトリニティ・カレッジから入手させた上で、1692年7月オックスフォードで前述の通りM. A. の学位を取得させた。スウィフトがトリニティ・カレッジでの3年有余の大学院生時代に、M. A. 取得のためのどの程度の単位がとれたか、当時の狼籍ぶりからして、まことに怪しいものである。オックスフォードでのM. A. 取得には、テンプルの力が甚だ大きかったといわれる

のは無理もない。

だが、テンプル家でテンプルの口述筆記の外に、その論文や書簡や外交上の覚え書きを編集する仕事は歴史や文学や政治への関心を深める結果になった。そして、現代史やギリジャ・ローマの古典や各種の旅行記を豊富に収めたムア・パークの蔵書は、スウィフトにとってこの上ないリベラル・エデュケーションの場となった。スウィフトは当時 1 日に 10 時間読書に耽った<sup>(77)</sup>。こうしてスウィフトの学力は急速に伸びていったのである。

社会的な成長への大きな契機となったのは、シーンおよびムア・パークでのウィリアム王との接触である。テンプルを信頼していたウィリアム王は、テンプルの政治上の助言をもとめて、時折、隠栖中のテンプルを訪れた。そのさい、テンプルがたまたま不在の折などは、スウィフトが庭園散策の先導役を勤めたりした。スウィフトの方はオランダ仕込みの本格的なアスパラガスの食べ方をウィリアム王から伝授されたりした。アスパラガスには後日談がある。ダブリンの出版業者フオークナーがスウィフトと会食していた折、たまたまフオークナーがアスパラガスのお替りを注文しようとする、スウィフトから皿に残してあるのを食べ終わるようにいわれた。「このアスパラガスの莖を食べると仰有るんですか」とフオークナーが訊ねると、スウィフトは「ウィリアム王は莖をいつも食べておられた」と答えた。フオークナーからこの話を聞いた者が、スウィフトのいうことをそのまま聞き入れるとは、おまえはなんて馬鹿なんだといわれると、フオークナーは面と向ってスウィフト師にいわれると、だれだって食べざるをえなくなるとフオークナーは答えたという。当時、アイルランドやイングランドの一般庶民の間では、アスパラガスの莖は食用にならないものということになっていたらしい。

ウィリアム王とスウィフトとの結びつきは更に続く。それは三年議会议案<sup>(78)</sup>が物議をかもしだした 1693 年春のことである。ウィリアム王はイングランド統治の実際を知らず、チャールズ一世が王座を奪われた上に断罪されたのも、かかる法案を通したためだと思っていた。法案にたいする態

度を決めかねたウィリアム王は、寵臣のポートランド伯<sup>(79)</sup>をムーア・パークに赴かせてテムプルの助言を求めた。即座の応答を控えたテムプルは更めてスウィフトをウィリアム王の元に派遣して、チャールズ一世が破滅したのは、短期議会に同意したためではなく、議会の解散権を放棄したためである旨説明させた。スウィフトは当時廿歳そこそこで、イングランドの歴史には通暁していたと自負している<sup>(80)</sup>。歴史を裏付けにしているスウィフトの説得は効を奏さなかったものの、かかる重大な用務をスウィフトに一任したことからも、テムプルがいかにスウィフトを高く評価していたかがわかる。

スウィフトはムーア・パークで当主ウィリアム・テムプルから当代の啓蒙的な人間に特有の社会への対応を教えられた。テムプルは広く書物に親しみ諸事に通じていた。彼は自らの貴族的な立場を意識していたが、人間的なぬくもりがないわけではなかった。当時はおそらく理性優先の時代だったので、意識的にも反ロマンティックな姿勢をとり、物事をすべて現実的に評価することを尊重したのである。

テムプル家には、スウィフトが滞在していた1689年の夏頃から興味深い異変が起きていた。妻のドロシー<sup>(81)</sup>は主にロンドンのポール・モール<sup>(82)</sup>にある居宅に住み、テムプルの実妹のマーサ・ジファード<sup>(83)</sup>がムーア・パークの家政を一切とりしきっていたことである。ドロシーはテムプルと別れた訳ではなく、ロンドンにあってメアリー王妃の腹心の一人として晩年を送っていた。

ウィリアム・テムプルとドロシー・オスボーンは、それぞれの親の反対を押し切って7年間の交際の末ようやく結ばれた。その間の事情は1648年から1654年にわたって二人の間に交された書簡に詳しい。わけでもオスボーンは書簡文の名手で、メアリー王妃の信任が厚かったのは、彼女の文才が大いにあずかって力がある。

ところで、テムプル家には、スウィフトの外数名がテムプルの厄介になっていた。とくに忘れてならないのはレベッカ・ディングレー<sup>(84)</sup>とエスター・ジョンソン<sup>(85)</sup>である。レベッカ・ディングレーはテムプルの遠縁

で、エスター・ジョンソンの生涯にわたってのコムパニオン（住み込みの話し相手で家庭教師の役も勤めた）であった。彼女はエスターがスウィフトの誘いでテンプル家を出てアイルランドに移った時も行動を共にし、スウィフトが死ぬ2年前の1743年7月他界している。エスターはテンプル家の執事の娘で、スウィフトが初めてテンプル家に出会った時は8歳の弱々しい子供だった。後、ステラの愛称でよばれるようになるエスターはスウィフトの生涯においてかけがえのない存在になる。

こういった環境の中で、スウィフトは独立のため僧界入りの腹を決める。スウィフトは、まずウィリアム王との接触からイングランドでの僧禄を当てにするが、その方面の話は一向に具体化されない。痺れを切らしたスウィフトは、1694年6月アイルランドで僧職に就くため、テンプルの反対を振り切ってダブリンに向う。ところが、ダブリンに着いてみると、当地の司教からアイルランドで僧職に就くにはテンプル家滞在時の身分保証が必要であることを教えられる。そこで約5ヶ月逡巡の上不本意ながら、スウィフトはテンプルに依頼状を書く。この依頼はテンプルとの和解のきっかけになる。発信後12日たらずで、スウィフトはテンプルから望んでいた書状を受取る。テンプルの力が効を奏して、スウィフトは1694年10月には助祭、1695年1月には司祭に任ぜられる。ウォルター・スコットは、このさい、当時アイルランド総督代理であったキャペル卿<sup>(86)</sup>宛の推薦状が付いていたのではないかと推測している。スウィフトは司祭に任ぜられたのとはほとんど同時にアントリム郡<sup>(87)</sup>キルルート<sup>(88)</sup>の聖職録——年俸百ポンド——をも与えられたからである。

こうしてベルファストの湖畔の田舎町キルルートで教区牧師としての生活が始まる。ところが、決まって教会にくる信者はごく僅かなので、スウィフトは会衆の獲得に必死になるが成果は思わしくない。そのさい、スウィフトは2人の知己に出会う。一人はトリニティ時代の友人ウェアリングである。彼はベルファストの富裕な家柄の出であった。スウィフトはその妹ジェインに関心をもち始め、ヴァリーナ<sup>(89)</sup>の愛称で呼ぶようになる。今日、スウィフトがヴァリーナに宛てた手紙が2通残っている。1通は1696

年4月29日付の書簡である。この書状にはヴァリーナへの恋情が露わである。まず、じれったさは恋い侘ぶる者にはつきもので、自分はかなりこの病いに冒されているといい、自身の希望や恐怖が他人に左右される愚かさを歎いている。ヴァリーナはスウィフトと知り合った当初からスウィフトを軽んじ、酷薄な振舞いがあった。彼女はスウィフトにいわせると、信実の愛情に伴う素朴な喜びが味わえない女性だった。だが、このようなヴァリーナにたいし、恋情にとりつかれたスウィフトは財産は望まぬといい、生活が安定するまでの自由な行動も認めるという条件までだして、スウィフトについてくるかどうかの決断を迫っている。この書簡の結びをみれば、スウィフトのヴァリーナへの想いが並々ではなかったことがわかる。

あなたが、いぜん私のものになることを拒否されるならば、すべて、あなたのものとして、これまで生きたように、死ぬ時もあなたのものとして死ぬ覚悟を決めた1人の男を、間もなく、しかも永遠に失うことになる。このことを是非とも忘れないでいてほしい<sup>(90)</sup>。

1700年5月4日付の同一女性への書簡では、スウィフトはヴァリーナという愛称は使わず、ジェイン・ウェアリングという本名を宛名にしている。4年という時間の経過がスウィフトを冷静にさせたのであろう。impatienceという言葉で始めて、逸る気持ちを抑えきれず相手の冷酷さをしきりになじっていた96年の手紙とは打って違って、まず冒頭で、ヴァリーナを健康を優しく気づかっている。そして、彼女以外の女性と結婚の意志がないことを更めて表明しながら、いくつかの実務的な質問を投げかけて、ヴァリーナに回答を迫っている。

「あなたは医者 of 忠言で結婚を控えたというが、健康をとりもどし、本気で結婚する意志があるのか」

「あなたは年300ポンド以下の収入で、家事を切り盛りできるか」

「私の気性に合わせ、私たち2人が目一杯仲睦まじく暮せるよう努力

する気があるか」

このような点を心掛けてくれば、その酬いは十分にするつもりだとスウィフトはいつている。彼が確かめておきたかったのは、夫との和合を第一とする妻としての適格性だった。

結局、ヴァリーナから望ましい回答はなく2人の仲はそれきり途絶えた。

スウィフトがキルルートで得た忘れてはならないもう1人の知己は、オックスフォードの友人で、妻子を抱えて北アイルランドに定住していたウインダー<sup>(91)</sup>である。彼は妻子を抱えて生活に困窮していた。スウィフトはキルルートの生活に嫌気がさしたせいもあり、ウインダーにキルルートの聖職録を譲ってアイルランドを引揚げることに決めた。スウィフトは当時、新しい職が定まらないうちにキルルートを去ることの軽卒さやヴァリーナとの一件を非難する無署名の手紙を数通受取った。1698年4月1日付のウインダーへの書簡の中で、キルルートを去ったことについて相手が知人なら納得がゆくまで理由を説明できたが、相手が雲の中の人間なら説明のしようがないといつている。スウィフトは結局この理由を明らかにしていないのだが、ムア・パークの快適さとは全く裏腹なキルルートの暮し向きとか、ヴァリーナ的一件とか、スコットランド系アイルランド人の非国教徒がキルルートで優位で、会衆の獲得が思うにまかせなかったことなどが若いスウィフトに嫌気を起させたことは事実だろう。しかし、新しい職は必ずしも決まっていなかったわけではなかった。一年半足らず留守にしていたムア・パークから再度戻ってくるようにという勧誘を受けていたからである。

こうして1696年5月、スウィフトは三たびムア・パークに落着くことになる。この時期にはスウィフトの格が上がって客分扱いになる。1698年スウィフトが出した宛先き不明の短かい手紙<sup>(92)</sup>には、「夕食になにが食べたいか料理の係りの者が私に聞きにくる。そこで私は勿体ぶった口調で、何ができるか聞いた上で、鳩料理その他の注文を出すのだ」といつている。

スウィフトをこのように格上げさせたのは、スウィフトの力量が更めて評価されたことの他に、テンプル自身の境遇の変化も手伝っている。テンプル自身年をとり、糟糠の妻は40年の結婚生活を経て1695年初めスウィフトの不在中に他界していた。こうした事情からテンプルの性格も和らぎスウィフトとの摩擦も少なくなっていた。それに、テンプルは回顧録の執筆や書簡の整理等に寧日ない有様で、スウィフトの助力を是非とも必要としたのである。そして事実スウィフトはその要望に応えた。テンプルの死後出版された5冊分の遺稿の編集料として、スウィフトが1冊当り40ポンド、計200ポンドを受け取っていることから、この点は明らかである。それにスウィフトは既述のごとく、この間余暇を利用して読書に励んだ。1696 / 7年の1月7日から1697 / 8年の1月7日迄の読書メモによると、次のような著作を読んでいる。主に古典および歴史書である。古典では『イリアッド』『オデュッセイ』ヴァージル、ホラチウス、ルクレチウス、キケロの『書簡集』テオフラスタスの『人物論』等。歴史書ではホップズによるツキジデスの翻訳、カムデンの『エリザベス』バーネットの『宗教改革の歴史』ブラックモアの『アーサー王』ヴワチュール<sup>(93)</sup>等で、とくにヴァージルとルクレチウスは、それぞれ2回および3回読んでいる。この外珍稀な航海記や旅行記も好んで読んでいる。

スウィフトは、こうした読書に疲れると、2時間おきぐらいにテンプル邸の近くの丘を駆け上ったり駆け下りたりして身体の鍛練に努めた。これは日課だったが、時には船頭のように舟を漕いだり、郵便配達夫のように馬をはしらせたりした。とくに、かなりの長距離を歩くのが好きだった。ファーンハムからロンドンまで38マイルを美しい景色を嘆賞しながら歩いたり、1日10マイルという、のんびりした足取りでチェスターまで歩いたりしている。このような徒歩旅行のさい、スウィフトは、きまって宿賃1ペニーの看板がでている安宿に泊った。だが、そのさい、きれい好きで神経質なスウィフトはシーツを取り替えて部屋は相部屋にしないように、女中にチップを与えてたのんでいる。馬車挽きや馬丁のつかう野卑なユーモアをスウィフトが好んだのは、このようにスウィフトがしばしば安宿に

泊って、そこで交される会話に馴染んだためだろうとL. スティーヴンはみている。

ところで、ムア・パークに帰ってスウィフトの注意を強く惹きつけたのは、15歳になってすっかり健康をとりもどしたステラだった。幼い頃病弱で、6歳の頃から読み書きの手ほどきをしていただけたにスウィフトの関心は並々でなかった。ステラは、やゝ太り気味だったが髪は大ガラスよりも黒く、行儀作法を心得、ことばづかいも丁寧で、スウィフトにいわせるとロンドンで彼女に優る麗人は見当らなかった。

ステラとは逆に、テムプルの妹、レイディ・ジファードには反感がつのるばかりだった。既述のテムプルの著作集5巻は、スウィフトの献辞や序文を添えて、ほぼ10年間にわたって出版されたのだが、最後の回顧録が1709年上梓された時、スウィフトはレイディ・ジファードの不興を買った。テムプルの存命中の政治家についての叙述が適切でないという理由からだった。スウィフトが不当に改変したとでも思ったのだろう。レイディ・ジファードとスウィフトは、このような芳しくない間柄だったが、ムア・パークでの生活はスウィフトにとって忘れがたい思い出になる。

1699年1月テムプルは他界するが、テムプルの死後もスウィフトは、しばしばムア・パークを訪れている。そして、30年後テムプルの甥に宛てた手紙では、スウィフト自身がラテン語の詩を刻んだムア・パークの榆の木のことを語っている。スウィフトは、この詩の中で、かつて自らが憩いの場所とした榆の木の緑陰での安らぎをテムプルの子孫に奨揚している。また、任地のララカー<sup>(94)</sup>で、居宅の敷地にムア・パークの庭園を模したささやかな庭を造ったことも忘れてはならない。ムア・パークはスウィフトの精神形成の上に測りしれない重味があったのである。

## 注

- (1) St. Andrew's Day. 11月20日. アンデレ Andrew は12使徒の1人で、もとガリラヤの漁夫ペテロ Peter の弟. ギリシャで殉教したといわれている。
- (2) 7, Hoey's Court, Dublin. ダブリン城 Dublin Castie の近辺である。ダブリン城は1268年完成。以来、イギリスによるアイルランド支配の拠点となった。



- (3) ST. Patrick Cathedral. 1190 年建立. アイルランドの守護神. 聖パトリックを祀る. 聖パトリックは 432 年アイルランド全島にわたってキリスト教の伝道を開始した。
- (4) Thomas Swift (1595 — 1658) スウィフトは, この祖父を敬愛していた。自叙伝の祖先にかんする記述の中で, この祖父についての叙述が最も長い。
- (5) Ross.
- (6) Goodrich 共にイングランド南西部のヘリフォード州 Herefordshire にある。
- (7) King's Inns.
- (8) Leicestershire イングランド中部の州。
- (9) Abigail Erick (1640 — 1710).
- (10) Thornton.
- (11) Godwin Swift (1624 — 95).
- (12) Jane Swift (1666 — 1736).
- (13) Bride Street.
- (14) Joseph Fenton.

スウィフトは *Journal to Stella* の中で姉に同情し, フェントンは dunce だといって歎いている。

- (15) Sir William Temple 邸。
- (16) Lady Martha Giffard (1638 — 1722).
- (17) Gray's Inn.
- (18) the old Marchioness of Ormond のいここであった。
- (19) the Palatinate of Tipperary.
- (20) Cumberland 州 (イングランド北西部), Whitehaven.
- (21) Kilkenny Grammar School. キルケニーはアイルランド東部の州. 州都も同名。
- (22) Dr. Thomas Sheridan (1687 — 1738) R. B. Sheridan の祖父. アイルランドにけるスウィフトの親しい友人. 僧籍にあって, 教師もしていた。
- (23) Kilrenny cats. キルケニーの喧嘩ねこは双方が尻尾だけになるまで戦ったといわれている。
- (24) Thomas Swift (1665 — 1752).
- (25) Francis Stratford.
- (26) William Congreve (1670 — 1729).
- (27) Puttenham, Surrey (イングランド南東部の州)。
- (28) South Sea Company.       •

スペイン領南アメリカとの貿易独占権を獲得して, 1711 年設立されたが, 1720 年事業の不成績が暴露されて株が大暴落し, 多くの破産者を出した。

- (29) Queen's Bench.

英国高等法院の一部である王座〔女王座〕裁判所、彼はこの付属の the Queen's Bench prison に収監された。

(30) To Mr. Congreve.

1693 年 11 月作。

(31) John Dryden (1631 — 1700).

17 世紀の代表的な詩人・劇作家。

(32) (33) The Old Bachelor. 1693 年 11 月 Theatre Royal で上演された。

(34) George Berkeley (1685 — 1753).

(35) Vanessa.

本名 Esther Vanhomrigh (1688 — 1723)。

(36) Doromore.

(37) Cloyne.

アイルランド共和国 Cork の東南東にある村。バークレイは 1734 年から 53 年迄この司教を勤めた。14 世紀の cathedral がある。

(38) St. George Ashe ( c. 1658 — 1718). 後、Cloyne, Clogher, Derry の司教を次々と勤めた。

(39) The Prose Writings of Jonathan Swift (Oxford) , Vol. V, p. 192.

(40) Ibid., p. 191.

(41) The Rev. Dr Whittingham, Archdeacon of Dublin.

(42) この逸話は Godwin おじの孫である Theophilus Swift から伝わった話として、Sir Walter Scott が Memoirs p. 14 n. に記録している。この一件があつてから、ホイッテイングムとスウィフトは仲の良い友人となったという。

(43) William Swift (1637 — 1706). トーマス・スウィフト師の 4 番目の息子。

(44) Mrs. Laetitia Pilkington (1712 — 50). Memoirs, 3 vols を著わす。

(45) In Search of Swift, p. 74.

(46) The Prose Writings of Jonathan Swift (Oxford), Vol. V, p. 192.

(47) Jacky Barrett.

(48) Buttery Books.

(49) Commons.

(50) Dr. Owen Lloyd, the Junior Dean. ( c. 1664 — 1743).

(51) Speciali gratiae.

(52) The Correspondence of Jonathan Swift (Oxford), Vol. 1, p. 12.

(53) Deane Swift (1706 — 83).

ゴドウィンおじの孫。

(54) John Forster.

スウィフトの伝記作者。

(55)(56)(57) good, ill, negligent.

- (58) Dr. Richard Baldwin.
- (59) Devon. イングランド南西部の州。
- (60) Rochester. イングランド南東部、ケント州北西部の都市。
- (61) 1703 年迄イングランドとアイルランドを往来したスウィフト自身の記録から、キルケニー・スクールとトリニティ・カレッジ在学中に母に会いに行った可能性がないことがわかる。
- (62) Sheen. Greater London 南西部の Richmond の近辺。
- (63) the Rev. John Worall.
- (64) 1928 / 9 年 1 月 18 日付書簡。  
The Correspondence of Jonathan Swift, Vol. III, p. 309.
- (65) Betty Jones.
- (66) Loughborow.
- (67) The Prose Writings of Swift (Oxford), Vol. V, p. 193.
- (68) The Triple Alliance.  
1668 年、フランスのライン進出を阻止するため、イギリス、オランダ、スウェーデンの三国間で締結された。
- (69) The Treaty of Breda.  
1667 年、本条約によって、オランダはイギリスに New York を譲渡した。
- (70) Moor Park.  
イングランド南東部 Surrey 州 Farnham 近辺。
- (71) John Temple (1655 — 89).
- (72) Sir Robert Sonthwell (1635 — 1702).
- (73) The Prose Writings of Swift (Oxford), Vol. V, p. 193.
- (74) Henrietta Howard, Countess of Snffolk ( C. 1688 — 1767 ).
- (75) Swift An Introdncion. p. 2.
- (76) Hartford College.
- (77) The Mind and Art of Jonathan Swift, p. 14.  
R. Quintana は『桶物語』にみられる豊富な allusion から、1 日 10 時間の読書は十分肯けるといっている。
- (78) The Triennial Act. 三年議会法。  
議会の期限を 3 年に限定する法律。1641 年発布されて、1694 年再制定されたが、1716 年 7 年議会法の制定により廃止された。
- (79) Hans Willem Bentinck, Ist Earl of Portland (1649 — 1709).
- (80) The Prose Writings of Swift (Oxford), Vol. V, p. 194.  
three and と書いて消してあその後に twenty と書いてある。また同じ行の上のところに one と書いてある。
- (81) Dorothy Temple, 旧姓 Dorothy Osborne。

- (82) Pall Mall.  
ロンドンの Trafargar Sgnare から St. Jame's Palace までの街路。
- (83) Lady Martha Giffard (1638 — 1722).
- (84) Rebecca Dingley ( C. 1665 — 1743).
- (85) Esther or Hester Johnson (1681 — 1728).  
愛称 Stella は星の意味。
- (86) Henry Capel (1638 — 96), Lord Deputy of Ireland.
- (87) County Antrim. 北アイルランド北東部。
- (88) Kilroot.
- (89) Jane Waring. 愛称 Varina。
- (90) The Correspondence of Jonathan Swift (Oxford), Vo1, p. 23.
- (91) John Winder ( C. 1717 歿).
- (92) The Correspondence of Jonathan Swift (Oxford) Vo1. 1, pp. 23 — 4.
- (93) the Iliad and Odyssey of Homer, Virgil, Horace, Lucretius, Cicero's Epistles, the Characters of Theophrastus.  
the folio translation of Thucydides by Hobbes, Camden's Elizabeth, Bishop Burnet's Reformation, Blackmore's Prince Arthur, Voiture.
- (94) Laracor アイルランド Trim の近傍。  
なお、本稿は、「スウィフトの自叙伝について」(中京大学教養論叢 26 巻 1 号)と略同一期間を扱っているので、記述に一部重複がある。

### 主要参考文献

- John Forster, The Life of Jonathan Swift (Folcroft Library Editions, 1972 ).
- Leslie Stephen, Swift (AMS Press New York, 1968).
- Henry Craik, The Life of Jonathan Swift, Vo1. I. (Burt Franklin, New York, 1969).
- Herbert Daris, ed., The Prose Writings of Jonathan Swift (Basil Blackwell, Oxford, 1969).
- Harold Williams, ed. The Correspondence of Jonathan Swift (The Clarendon Press, Oxford, 1972).
- Denis Johnston, In Search of Swift (Hodges Figgis, Dublin, 1959).
- 三浦 謙『スウィフトの自叙伝について』(中京大学教養論叢 26 巻 1 号, 1985)。